A. J. Toynbee and R. G. Collingwood: A Comparison of their Historical Thoughts

Junichi Kasuga

This paper is aimed at a comparative study of two well-known twentieth-century British thinkers of history: A. J. Toynbee and R. G. Collingwood.

The relationship of the two coeval thinkers has received little attention due probably to the discrepancy between their historical thoughts on their initial examinations. Indeed, Collingwood's uncompromising criticisms of Toynbee in *The Idea of History* and Toynbee's responses to these in *A Study of History* appear to support this view.

Against this backdrop, I demonstrate that they misunderstood each other: Collingwood, criticising Toynbee for being unaware of historians' subjective biases in grasping historical facts, failed to understand Toynbee's conception of history as an activity to bridge the incommensurability between foreign civilisations; Toynbee, who attacked Collingwood's perspective as being too intellectualist, overlooked that Collingwood conceptualised history as a mode of human thinking to understand without intolerance systems of ideals or thoughts different from one's own.

To conclude, I suggest that Toynbee and Collingwood shared a similar goal concerning the study of history.

A・J・トインビーとR・G・コリングウッド[1)]

――「文明」と「歴史」をめぐって――

春　日　潤　一

Ⅰ．はじめに

A・J・トインビー（Toynbee: 1889-1975）とR・G・コリングウッド（Collingwood: 1889-1943）といえば、20世紀イギリス歴史思想においてはもっともよく知られ、読まれた著述家と言ってもそれほど違和感はないだろう。

トインビーは、オックスフォード大学にて古代ギリシア・ヘレニズム史を専攻し、大著『歴史の研究』（1934-1961）であまりにも著名な歴史家である。一方、コリングウッドは、やはりオックスフォードにて学んだ考古学者・哲学者として知られる。彼の『歴史の観念』（1946）は、20世紀後半の歴史哲学に大きな影響を及ぼし、歴史哲学・歴史学方法論における古典となっているといってよい。また、哲学における彼の歴史的なアプローチは、I・バーリンやB・ウィリアムズ、A・マッキンタイアをはじめ20世紀後半の英語圏を中心とした哲学者らに影響を及ぼし[2)]、さらには現代哲学における意義を再評価する研究も現れている。

この２人は同じ1889年生まれであり、オックスフォードにて歴史研究に関わったという共通点がある。コリングウッドの日記には、A・D・リンゼイ（Lindsay: 1879-1952）や、B・クローチェなどのイタリア観念論をイギリスに紹介したJ・A・スミス（Smith: 1863-1939）とともに、1912年にトインビーらしき人物とベイリオル・コレッジで夕食を共にしたとの記録がみえる[3)]。また、コリングウッドはトインビーへの私的な手紙のなかで『歴史の研究』についての感想を述べ

ている[4)]。これらの事実から、二人は個人的面識もあったと思われる。より重要なのは、コリングウッドが『歴史の観念』で、当時最初の３巻が世に出ていたトインビーの『歴史の研究』への批判を行い、トインビーが同書の続刊においてコリングウッドの批判への応答を試みていることである。

こうした実質的な関係がありながら、この２人を正面から取り上げて歴史思想的な関心から検討する試みは、意外にも少ない。管見の限り、主要なものとして目にとまるのは、ヘイドン・ホワイトの論考［White 1957］である[5)]。ホワイトは、コリングウッドとトインビーを、イギリス伝統の経験論の流れをくむ19世紀来の歴史実証主義に対する新たな運動の「もっとも重要な代表者の２人」［White 1957, 147-148］と評した上で、次のように結論している。

> 近代西洋人によって歴史に問われている問題に適切に答えていないと実証主義や経験論を非難するとき、個別の点では見解が対立するとしても、コリングウッドの「観念論（idealism）」とトインビーのグノーシス主義的神智学（Gnostic theosophy）は、ともに一致するのである。（White 1957, 177）

しかしながら、両者の立場は、『歴史の研究』と『歴史の観念』を見ても「個別の点」として片付けられないような懸隔があるようにも見える。また、仮に実証主義的歴史観とは異なる立場を提唱した点で一致しているとしても[6)]、それによって両者は何を目指したのだろうか。こうした問題について考えるためには、両者の歴史思想を、その思想的発展過程も踏まえて再検討する必要があるのではないか。

そこで、本稿では、とりわけ両者の思想形成期に注目しながら、その相違点と共通点の思想史的考察を試みる。こうした試みを通して、両者の歴史思想の意義を再検討する。

Ⅱ．『歴史の研究』vs.『歴史の観念』

両者の歴史思想を再検討するに当たって、まず、『歴史の研究』（トインビー）

と『歴史の観念』（コリングウッド）という彼らの主著に焦点を当て、これらの著作における両者の議論を概観する。

１．両著作間の議論の経緯

トインビーの『歴史の研究』は、「再考察」と題する第12巻まで含めると実に27年をかけて出版された。この出版プロセスは、①第１巻～第３巻（1934年）、②第４巻～第６巻（1939年）、③第７巻～第10巻（1954年）、④第11巻（1959年）、⑤第12巻（1961年）という５段階にわたっている（当初の計画では10巻までであり、第11・12巻は補巻といった趣が色濃い）。

一方、コリングウッドの『歴史の観念』は、コリングウッド没後、彼の学生だったＴ・Ｍ・ノックス（Knox）の編集により出版された。単純に年代のみを比較すると『歴史の観念』はトインビーの『歴史の研究』出版の第２段階（1939年）後に出されたわけだが、「トインビーの『歴史の研究』はこれまで最初の三巻が出ただけでいずれ遥かに厖大な著述になるはずだが（…）」［Collingwood 1993, 159］という記述からうかがえるように、コリングウッド自身がこの原稿を書いたのは『歴史の研究』第３巻までが出版された時点である[7)]。つまり、コリングウッドの『歴史の観念』におけるトインビーの『歴史の研究』批判は、第１巻から第３巻までをその対象としていることになる。コリングウッドは、この『歴史の観念』第４部においてトインビーを取り上げている。

その後、『歴史の観念』が出版された1946年から８年後となる1954年に、トインビーは『歴史の研究』出版の第３段階である第７巻から第10巻までを公刊した。コリングウッドの批判に対するトインビーの応答はこの時期に集中している。まず、『歴史の研究』第７巻と第８巻では、コリングウッドの著作への言及が見えるようになる。例えば、第７巻ではコリングウッドの『形而上学論』（*An Essay on Metaphysics*, 1940）と『精神の鏡』（*Speculum Mentis*, 1924）、第８巻では『歴史の観念』に言及されている。続く第９巻では、付録として「歴史家と歴史家が研究する対象の関係についてのＲ・Ｇ・コリングウッドの見解」と題して20ページにわたる議論を展開している。

このように、トインビーの『歴史の研究』とコリングウッドの『歴史の観念』は、それら自体がすでに一連の議論の応酬を形成する関係にある。そこで、以下では、この両著作の間の議論を整理する。

2.『歴史の観念』におけるトインビー批判

『歴史の観念』においてコリングウッドは、トインビーの『歴史の研究』を19世紀来の「実証主義的観点の再説」[Collingwood 1993, 159] と位置づける。コリングウッドによれば、「実証主義者」たちは、自然科学を「(事実が) 感覚的知覚によって直接的に確認され、その事実から帰納一般化することで法則を組み立て」るものと理解し、そのような方法論を歴史研究においても採用しようとする。この実証主義の原理からすれば、歴史研究は「事実を確認する」という第1段階と法則の発見という第2段階によって構成される [Collingwood 1993, 127] [8)]。

こうした方法論からすれば、歴史研究とは、まず「空前の正確性と批判性とをもって証拠を吟味」し、詳細な歴史的事実を発見することであり、歴史における誠実さとは「ありとあらゆる孤立的事実に関し無限に綿密であることに他ならぬ」ことになる [Collingwood 1993, 127] [9)]。トインビーの『歴史の研究』がその細部において「信じがたいほどに博大な学識」を含むというコリングウッドの評価は、同書の歴史叙述に実証主義の第1段階を看取したものといえる。

さらにコリングウッドは、『歴史の研究』における「文明」概念が示すように、歴史上の人間の生活を生物学的な視点から観察するにとどまり、その知的な生活の内部にまで分け入ろうとしていないと批判する。

> 彼［トインビー］にとって、歴史は一個の景観、歴史家が観察記録せる諸事実で構成されたもの、歴史家の凝視に外的に呈示される現象に過ぎず、歴史家が内部に参入して自己のものとすべき諸経験ではない。[Collingwood 1993, 163]

つまり、歴史上の「文明」の興亡を生物学的類推によって描き、ある種の法則を見出そうとするトインビーの歴史体系に、コリングウッドは実証主義の第２段階をみたと言えるかもしれない。

このような原理に基づく限り、『歴史の研究』の体系は、それがいかに壮大で精緻であろうとも、「入念に配列し、レッテルを貼り、既成の諸史実を収め得るようにした分類棚の体系」［Collingwood 1993, 163］に変わらないことになる。こうした試みに伴う危険としてコリングウッドが指摘するのは、トインビーの構想する体系に歴史的諸事実を組み込む「解剖的行為」によって、それらの事実が本来の文脈から切り離されることを忘れることである。トインビーの行なったように「史実を分類整理するためには、歴史の生体をまず殺して［…］解剖できるようにしなければならない」［Collingwood 1993, 163-164］のである。このようなトインビーの歴史観をコリングウッドは「自然主義的」と形容している［Collingwood 1993, 163］。

以上のようなトインビーへの批判を、コリングウッドは以下の２つに集約する。

第一に、歴史研究の対象として「社会」や「文明」という単位を設定したことである。この前提に立つ限り、「歴史自体つまり歴史過程は厳しい分割線で相互に排除し合う諸部分に分れ、従って、各部分を他の部分に重複させ相互浸透させる歴史過程の継続性が否定される」［Collingwood 1993, 164］。

第二に、歴史過程とそれを認識する歴史家の関係に関する誤解である。「歴史家が歴史過程自体の不可欠要素であり、歴史家は自身が歴史的認識を獲得せる過去の諸経験を自身の内部に再生するということをトインビーは知り得なかった」［Collingwood 1993, 164］。『歴史の研究』におけるトインビーの関心は、彼が蒐集した厖大な歴史的諸事実をどのように並べるかという点に集中しており、コリングウッドに言わせれば、彼がそうした諸事実を『歴史の研究』という著作において配列することによって構成された歴史は、必然的に彼自身を抜きにしては有り得ないものであることに無自覚であったのである。

トインビーのこうした傾向は、彼の実証主義的方法論に根ざしているという

のである。

3．トインビーによるコリングウッドへの応答

上述のコリングウッドによるトインビー批判は、遅くも『歴史の観念』が刊行された1946年頃にはトインビー自身の知るところとなったはずである。では、トインビーはこのコリングウッドの批判に対してどのように応答したのだろうか。ここでは、おもに『歴史の研究』の第9･10巻に注目して、トインビーの応答を素描する。

＊

まず、コリングウッドによるトインビー批判の第一の論点である「文明」概念を歴史研究の単位として導入したことについて、トインビーは、第一次大戦後のヨーロッパで注目された『西洋の没落』におけるO・シュペングラーの「文明」概念とコリングウッドのそれを比較しながら、彼自身の社会・文明の概念は、生物学的なシュペングラーのそれよりも、コリングウッドに近いと反駁する。

> （文明の性質についての考え方を）シュペングラーとともに、無意識の物質的生命過程と考えるのか、それともコリングウッドとともに、観念の精神的な動きとみるのか。結局のところ、コリングウッドの考え方はシュペングラーの考え方よりも厳密で徹底している。私の立場は、［…］文化は社会によって伝えられ、社会は多くの人間の個々の活動領域相互の共通の基盤であるということである。人間の本性には、疑いなく潜在意識的、本能的、自然の発露たる部分もある。しかし、人間であることの典型的特徴は、意志し計画しそれを意識的に行うことである。したがって、私の立場はシュペングラーよりもコリングウッドに近い。（X, 439）

次に、コリングウッドによる第二のトインビー批判について、トインビーは、『歴史の研究』第10巻において次のように述べている。

自称科学的・客観的歴史家たちは、一つの罠にはまっているように思われる。彼らは、科学的客観性を追求するあまり、彼らが研究している人間的事象の独自性を主張するに至った。しかし、[…] 個性の独自性を信じることは、人間の普遍性に対する信念を暗に否定することになる。そして今度はその否定が、歴史家自身の人格にも当てはまる相対性を認めることにつながる。(X, 50)

トインビーがここで論じているのは、探究によって得られる歴史的事実が（自然）科学における事実について信じられているのと同じような普遍性・客観性を有するのかという問題である。この問いについてトインビーは、歴史の研究によって得られる成果たる歴史的事実は自然科学の研究によって得られる事実とは異なり、それを研究する者（歴史家）自身の人格といった相対的・主観的要素を免れることはできないことを認めている。その上で、トインビーは、自身のこの立場がコリングウッドの見解と共通していることを明言している。さらにトインビーは、『歴史の研究』同巻で、このような事実の客観性をめぐる歴史と科学の対立は、彼自身の例えを用いるなら、冷戦下のイデオロギー対立のように深刻で鋭いものだとしつつ、彼自身も、歴史研究において個人的なバイアスを免れないことを明示的に認めている（Ⅸ, 190）。このように、トインビーは、『歴史の研究』の歴史記述を貫くのは歴史的事実が自然科学における事実と同様の客観性をもつと信じる実証主義的な歴史観だとみなすコリングウッドの評価に対して異議を申し立てる。

コリングウッドの批判に対する以上のようなトインビーの応答は、単なる異議申し立てにとどまらず、翻ってコリングウッドの「歴史」概念に対する批判へと転じる。トインビーによれば、コリングウッドの「歴史」概念は次のようなものである。

コリングウッドにおいて、非の打ちようのない知識の類型とは数学者とその研究対象の関係であることは明らかである。知識のこの数学的な類型が

コリングウッドの理想である。(IX, 726)

トインビーは、コリングウッドにおける理想的な知識とは、数学者にとっての数学の公理・定理といった知識と同等の確実性をもつ知識であると理解する。トインビーのみるところ、このことは“あらゆる歴史は反省的思考（reflective thought）の歴史”［Collingwood 1993, 304-307, 趣意］たる歴史的知識の場合も同様である。この「反省的思考」というコリングウッドの「歴史」概念は、歴史とは過去の人びとによる合理的な思考の歴史であるということを意味している。すなわち、過去の人びとによる合理的思考を探究することによって歴史的知識を形成するのが歴史家の営みであることになる。したがって、過去の出来事に関する知識（歴史的知識）は、合理的に把握可能な過去の人びとの「反省的思考」とその実践としての行為を抽出して構成されたものということになる。その意味で、コリングウッドにおける「歴史」は、すぐれて主知主義的な概念として理解される余地がある[10)]。トインビーにいわせれば、このコリングウッドの「歴史」概念は、その確実性・客観性の度合いにおいて数学者の目指す数学的知識と変わらない。

このコリングウッドの「歴史」概念とそれが根ざす主知主義的な「思考」概念は、トインビーには実際の歴史家の実践を無視した抽象化と映った。トインビーからすれば、歴史家は、合理的な「思考」のみならず、「意志（will）」、「感情（feeling）」、「衝動（impulse）」といった情緒的な要素も重視するはずである。つまり、トインビーにとって過去の人物の「思考」は常に反省的・合理的なものとは限らず、種々の情緒的要素がないまぜになったものである。

現実生活では、人間経験のさまざまな要素からなる縄の非知性的なより糸とは別に思考が見出されることは決してない。他の人びとの経験に「立ち入り」、それを「生き抜く」ことを歴史家に要求するコリングウッドが正しいとしても、知性的なより糸以外のあらゆる経験の糸を無視することを歴史家に命じる点で彼は間違っている。(IX, 732).

4．議論の焦点

以上、コリングウッドの『歴史の観念』とトインビーの『歴史の研究』における両者の議論を概観した。

まず、「文明」の概念をめぐっては、「文明」概念によって歴史研究の単位を区切るトインビーを批判するコリングウッドに対し、トインビーは、文明を人間の合理的な本性に特有のものであるという点でコリングウッドと同じ立場であると表明することで応答している。だが、このトインビーの応答には苦しさが残るのも否めない。というのは、「文明」概念を軸とした歴史体系を構築しようとする試みをも実証主義的と指摘するコリングウッドの批判に十分に答えているとは言い難いからである。にもかかわらず、なぜトインビーは敢えて自らをコリングウッドに近いと主張しようとしたのだろうか。この点をより正確に把握するには、トインビーの「文明」概念を掘り下げて理解する必要がある。

また、歴史家とその対象の関係についても、トインビーは、歴史家が自らの主観性のバイアスを免れることはできないことを認めており、コリングウッドと見解を共にしている。その上で、歴史を人間の合理的思考に注目して過去の出来事を探究する営みとして理解するコリングウッドに対し、トインビーはそれでは歴史の概念として狭すぎると批判している。よって、争点は「歴史」をどう理解するかという点に逢着する。

上述のことから、この両著作における議論の焦点は、「文明」と「歴史」という２つの概念にあることがわかる。では、結局のところ、これらの点をめぐって、両者の議論はどのように評価できるのだろうか。また、両者は何をめぐって対立しているのだろうか。以下、それぞれの論点について、両者の別のテキストも参照しながら、掘り下げてみたい。

Ⅲ．「文明」の概念

トインビーの「文明」概念をめぐっては、Michael Lang（2011）による分析が示唆的である。Langによれば、「文明（civilisation）」という概念は18世紀のヨーロッパにおいて「ある特定の共同体における争いのない関係とそうした行動様

式の理性を通じた拡大」として登場した。その後19世紀末までに、「ヨーロッパ人たちは世界の統合を彼らの革新と力の結果として説明し、それにともなって、普遍的到達点としての『文明』がヨーロッパ人の『文明』とほとんど同義になっていった」[Lang 2011, 755]。このような意味での「文明」とは、実質的にヨーロッパ人たちのそれを除いては他に「文明」を認めない単数形の概念であり、「文明」がその他の「未開」の地域に広がることによって「文明化」されるものとして理解されていた。最初期におけるトインビーも、19世紀末のヨーロッパにおいて広く共有されるに至ったこのような「文明」概念を共有しつつ[11)]、歴史研究の単位としては、あくまでも「ネーション（nation）」概念を単位としていた。トインビー最初期の著作である『ナショナリティと戦争』（*Nationality and the War*, 1915）には、当時の彼のそうした「ネーション」概念がよく現れている（春日 2005）。

ところが、トインビーの「文明」概念は、第一次大戦終了後の数年間に起こった出来事を契機として変容することになる[12)]。大戦終盤以降、イギリス外務省の情報機関で対オスマン政策の分析という戦時任務に従事するなかで、トインビーは「世界のヨーロッパ化が必然的に世界の統合をもたらすのかという疑い」を抱くに至った。さらには、パリ講和会議の使節団の一員として戦後処理の実務に携わる中で「道徳的差異が政治秩序を圧倒しているように思われ、共時的な区別としての『文明』と単一の通時的な進歩としての『文明』とが厳しく比較考量された」（Lang 2011, 765）のである。そして彼は、政治問題や道徳的秩序、そしてそれらの関係についての見方をめぐり、イギリスをはじめとしたヨーロッパ諸国とオスマン地域の交渉相手との間に横たわる通約不可能性（incommensurability）に苦しむことになる。

こうした事態のなかで、彼は「文明」についての考えの変更を迫られることになる。1922年に出版された『ギリシャとトルコにおける西洋問題―文明の接触の研究』は、そのタイトルからもうかがえるように、ヨーロッパのみを単一の「文明」としてみなす従来の単数形の「文明」概念とは一線を画し、世界に「文明」が複数あることが前提とされている。

さらに、ここでのトインビーの「文明」概念に特徴的なのは、「文明」を自然の摂理によって生と死を繰り返す生物体の比喩を使って説明していることである。また、複数の「文明」の接触は「これまで常に、そして引き続き人間の進歩と失敗の主要な要素であったし、あり続けるだろう」（Toynbee 1970, xxviii）という見方を示している。よって、後年の『歴史の研究』における彼の「文明」概念がその原型を現しているということができる。

こうした第一次大戦後のトインビーの「文明」概念をみると、歴史的な人間集団としての「文明」を生物体の生死のサイクルに譬えて、生物学的な用語を用いて語っているという点は、コリングウッドの指摘の通りである。また、「文明」を歴史研究の単位とするにしても、具体的にどのような単位で「文明」とするのかという問題は、歴史家の恣意性を免れることができないことも、コリングウッドの批判のとおりであろう。この点はトインビー自身も認めている。

ただし、トインビーの「文明」概念の変遷が示すのは、彼の歴史研究の単位が変わったということだけではない。彼の「文明」概念の変容によって意図されていたのは、旧来のヨーロッパ中心主義的な単数形の「文明」概念から、いってみればより普遍的な複数形の「文明」概念への転換だったのである。

ところで、この複数形の「文明」概念を前提したときに問題となるのは、トインビー自身も実務上直面した文明間の相互理解という課題である。この課題を克服するために、トインビーはどのような方策を示そうとしたのだろうか。この問題を考えるときに鍵となるのが「歴史」の概念である。

Ⅳ.「歴史」の概念

トインビーは、従来の単数形の「文明」から複数化された「文明」概念へと変容することで問題となる「通約不可能性」の問題をどのように捉えていたのだろうか。この問題を克服するための処方箋は、彼が1924年に翻訳・編集した『ギリシャ歴史思想―ホメロスからヘラクリウスの時代まで』に寄せた序文に示唆されている。

ヘレニズム期の歴史思想を翻訳するという同書の意義として、トインビーは

「（私たちとは）無縁の文明において具現化された遠く離れた過去が、私たちの生活が根ざしている最近の過去よりも、主観的には私たちの生活に近いことがある」［Toynbee 1950, xiii］と述べる。このことをトインビーは、1950年に出版された同書の第２版への序文において、よりはっきりと述べている。

> 本書に英語で再現されているギリシャ思想は、世界大戦や階級闘争、はっきりと異なる社会的遺産をともなって間近に近接する人びとの間の文化的遭遇、大量虐殺と英雄的行為、または善と悪のまだら模様の網の目に織り込まれたその他もろもろの謎めいた様式が人間精神において現れたものである。それらは人間精神をして人間本性の矛盾と格闘せしめるようなものなのである。［Toynbee 1950, xxix-xxx］

つまり、第一次大戦という出来事を経たトインビーの時代にイギリスの人びとの生活上で直面している課題が、その直接の近い過去―ヴィクトリア期―よりも、ヘレニズム期におけるそれのほうがより切実で現実味のあるものとして映ることがある、というわけである。よって、「哲学的な意味では、あらゆる文明が互いに同時代のものであったし、今後もあり続ける」［Toynbee 1950, xiii］ことになる。つまり、トインビーは、時間的・空間的に異なる位置にある文明であっても、私たちの文明と同時代的であり得ると主張するのである。そして、こうした同時代性を明らかにするのが翻訳の仕事のもつ可能性であり、さらに言えば、「歴史」の仕事なのである［Toynbee 1950, xxvi］。

前述したように、このような「歴史」概念を示していたトインビーは、コリングウッドの「歴史」概念を、狭すぎる概念であるとして批判した。これは、コリングウッドにおける「歴史」という営みが、おもに過去の人間の合理的思考に注目してその思考を論理的に再構成するものとして理解されていたことによる。

しかしながら、本稿筆者には、「歴史」をめぐるトインビーとコリングウッドの立場の懸隔はトインビーが主張するほどには大きくないように思われる。こ

のことは、第一次大戦後間もない1919年、コリングウッドが、幼少期に父を通じて親しんだ美術評論家Ｊ・ラスキン（1819－1900）の生誕100周年記念学会において行った講演「ラスキンの哲学（*Ruskin's Philosophy*）」にうかがわれる。この講演は、内容的に荒削りでやや言い過ぎのきらいもあるものの、コリングウッドの思想的モチーフをうかがい知るためにここでは取り上げたい。

「ラスキンの哲学」でコリングウッドは、ラスキンが活躍した19世紀中葉のイギリス思想における顕著な特徴として、思考方法における「論理的なもの（the Logical）」と「歴史的なもの（the Historical）」との対立を挙げる[13)]。

コリングウッドによれば、「論理的方法」が前提するのは、「あらゆる個別的事実は何らかの永遠で不変の原理、時間が何の影響も与えないような一般法則の一例であること」、「一般法則は、その一例に過ぎない個々の事実よりもより重要で、知る価値があり、現実的であること」というものであった。こうした前提に立つ思考方法が目指す目的は一般法則の発見である［Collingwood 1964, 12］。このような思考様式の実践面における帰結として、コリングウッドは次の３点を挙げている。第一に、「事実―科学、歴史、人間本性、一般的経験における事実―へのある種の軽視」である。第二に、「常習的な不寛容」である。もし自分が属する政治体制が「永遠で自然な人間の権利」に基づいたものであると信じるのであれば、その他の政治体制はまったく「不道徳で無価値」に違いないという見解が導かれるのは必然的である。第三に、「あらゆる種類の精神的活動における単調さと硬直性への傾向」である。つまり、規則や先例という「舗装された道路」から外れることを忌避し、一様で画一的な思考や行為のあり方が奨励され賞賛されさえもする傾向である。

この「論理的方法」に対して、「歴史的方法」はあらゆる面で対照的である。コリングウッドは、「歴史的方法」を次のように説明する。

> 論理的精神が一般法則を求めるところで、歴史的精神は個々の事実を求めこれらの事実を法則ではなく他の事実に訴えることで説明する。また、事実の説明に取り組むとき、歴史的精神は、「この事実がどんな一般法則を説

明するか」ではなく「どのような特有の状況でその事実が生じたのか」を問う。[…] 政治生活の課題に当っては、歴史的精神は人間の自然の権利を画定するよりも、むしろ特定の戦争、論争、あるいは提案の是非を突き止めようとするのである。[Collingwood 1964, 14]

そのため、この「歴史的精神」の本来の傾向性は「常に寛容（tolerance）に向かって」おり、「自らの理想とは大きく異なる理想を、共感（sympathy）を欠くことなく学ぶ幅の広い態度と構えを誘発する」のである［Collingwood 1964, 14-15］。

その上で、コリングウッドは、ラスキンを後者の精神の持ち主として称揚し、「歴史的精神」を肯定的に評価する。すなわち、この「ラスキンの哲学」におけるコリングウッドの「歴史」概念は、厳密な論理整合性を追求し一般法則を目指すような「論理的精神」とは対極にあり、異質な存在への共感的理解を目指す寛容を特徴とするのである。

こうした初期コリングウッドの「歴史」概念に照らして考えれば、「数学的知識と同等の確実性・普遍性」を歴史的知識にも求めているというトインビーによるコリングウッド批判は、その妥当性に疑問符がつくことは否めない。むしろ、異なる理想を共感を欠くことなく理解しようとする態度・構えを「歴史的精神」に求めるコリングウッドと、自らの文明とは時間・空間的位置の異なる文明を理解することが「歴史的洞察力」であり「歴史」の仕事であるとするトインビーは、異質な対象を理解するための思考様式・方法論として「歴史」という人間精神の思考のあり方に期待しているという点で、じつは同じものを目指していたのではないだろうか。

V. むすび

トインビーとコリングウッドは、一見するとかなり趣の異なる思想の持ち主であるように見える。トインビーの『歴史の研究』において展開される壮大な体系は、歴史とは過去の思想の再演であると主張し、歴史家の主観性のバイアスへの素朴な無自覚を批判したコリングウッドの歴史思想とは、水と油のよう

でもある。

確かに、「文明」の盛衰を生物体の生死に重ね合わせて図式的に説明するトインビーの「文明史観」は、自然を探究するための方法論と人間の思考を探究するための方法論との峻別を説くコリングウッドの思想とは相容れないものだったのかもしれない。

だが、本稿での検討からみえてきたのは、この両者は互いに誤解し合っていたのではないかということである。歴史家の主観性のバイアスに無自覚だとトインビーを批判するコリングウッドは、異なる「文明」を理解するための営みという意義をトインビーが「歴史」に込めていたことを見落としていた。一方、コリングウッドの「歴史」概念を人間の情緒的要素を欠いた極度に主知主義的なものと批判したトインビーも、異質な理想・思想体系への共感的理解のための思考様式として「歴史」を捉えていたコリングウッドの一面を捉え損なっていたように思われる。そして、両者が互いを誤解したまさにその部分にこそ、じつは両者が共通して「歴史」に託した意味があったのである。

注

1）本稿は、東洋哲学研究所第31回学術大会（2016年3月20日）における本稿筆者の報告にもとづいたものである。本稿の推敲過程では、同年9月に同研究所にて行われた研究会での筆者の報告に対し蝶名林亮氏はじめ出席者諸氏から有益な指摘を得た。ここで謝意を表したい。

2）バーリンへの影響については（Skagestad 2005）、ウィリアムズへの影響については（Koopman 2010）を参照。

3）October 30, 1912, Collingwood Diary.

4）W・H・マクニールによるトインビーの評伝 *Arnold J. Toynbee: A Life* では、オックスフォード大学ボドリヤン図書館所蔵のトインビー・ペーパーから、1939年にコリングウッドからトインビーへ宛てた以下の手紙の内容が引用されている。「（私が思うに）いやしくも歴史に関心のある他の人びとと同様、私はあなたの最近の3巻を読んでいるところです。そして私はあなたに祝福の意を書き送らねばなりません。これほどまでに完全な歴史についての学識をもつ人がいようとは、私には驚きです。［…］その学識は、それを有する者がただそれに甘んじるのではなく、それを使いこなすことができるためにほとんど不足のないものです。」（McNeill 1989, 177）

5）他に、コリングウッドに擁護的な立場からの論考として［河瀬 1968］、トインビーの立場からコリングウッドの批判に応答する小論として［Myers 1947］も挙げられる。

6）実証主義へのアンチテーゼとしてトインビーとコリングウッドを捉える見方は、（Hutton 2014）においても継承されている。

7）この点について編者のノックスは、このトインビーに関する部分が1936年に執筆され、その後大きな改訂はなされなかったとしている（Collingwood 1993, 159f.）。

8）コリングウッドは、歴史研究に対する実証主義のこのような考え方の例を、オーギュスト・コントの社会学に見いだしている［Collingwood 1993, 128］。このようなコリングッドの「実証主義」理解は、第1段階をもって実証主義とする一般的な理解（例えば、カー（1961, 4-6））とは相違がある。

9）『歴史の観念』において、コリングウッドは、19世紀に登場したこのような歴史における実証主義的修史として『ローマ史』で知られるドイツの歴史家T・モムゼン（Mommsen, 1817–1903）やイギリスの法制史家F・H・メイトランド（Meitland, 1850–1906）を挙げている。

10）人間の合理的思考に重きをおくコリングウッドの「歴史」概念をめぐっては、その主知主義的側面が早くから批判されてきており、トインビーの批判はその一例とみることができる。この点について河瀬は、コリングウッドを擁護する議論を行っている［河瀬 1968］。また、近年では彼の「歴史」概念には情緒的な側面も含まれるという指摘もなされている（Hyrkkänen 2009）。

11）インテレクチュアル・ヒストリーを専門領域の一つとするLangは、この最初期のトインビーにおける「文明」概念の思想的源泉として、19世紀来のイギリスにおけるH・スペンサーらの社会進化論とT・H・グリーンらのイギリス観念論との間の相克を挙げている（19世紀イギリスにおける社会進化論とイギリス観念論の相克については［Boucher, 2014］も参照）。トインビーの知的形成期にあたる20世紀初頭のイギリスでは、この両者の相克の克服が思想的な課題とされていた。Langによれば、そのような状況にあってトインビーは、社会進化論からは生物学的な因果関係という観念を、イギリス観念論からは、共同体や国家といった社会集団を人間理解のための基本的単位と考える「方法論的集団主義（methodological collectivism）」［Collini 1978, 9-10］を継承していた［Lang 2011, 759］。

12）拙稿［春日 2005］では、第一次大戦中の『ナショナリティと戦争』の段階で、「ネーション」概念を歴史研究の単位とすることの不適切性について、トインビーが半ば自覚的であったことを論じた。

13）コリングウッドは、この対立をカント的なものとヘーゲル的なものの対立という形でも言い換えているが、そのような対比が具体的にどのような意味で言えるかについては述べていない。この点については、コリングウッドの思想的モチーフを知るためという本稿での制約上、これ以上は立ち入らない。

凡例

＊トインビー『歴史の研究』の出典表記は、括弧内に巻番号（ローマ数字）、頁番号の順で記した。

＊トインビーとコリングウッドのテキストの邦訳は、原則として参考文献リストに記載の訳本に依拠したが、本稿筆者が変更を加えた箇所もある。

参考文献

Boucher, D. “British Idealism and Evolution.” In *The Oxford Handbook of British Philosophy in the Nineteenth Century*, by W. J. Mander, Oxford: Oxford University Press, 2014. 306-323.

Collingwood, R. G. *The Idea of History, the Revised edition with an Introduction and additional material*. reprinted editon. Edited by Jan van der Dussen. New York: Oxford University Press, 1993.（コリングウッド，『歴史の観念』．小松茂夫・三浦修訳．紀伊国屋書店，1970.）

―. “Collingwood Diary.”

―. *Essays in the Philosophy of Art*. Edited by A. Donagan. Bloomington: Indiana University Press, 1964.

Collini, Stefan. “Sociology and Idealism in Britain 1880-1920.” *European Journal of Sociology* 19, no. 1 (1978): 3-50.

Hutton, A. “‘A Belated Return for Christ?’: the reception of Arnold. J. Toynbee’s A Study of History in a British context, 1934-1961.” *European Review of History* 21, no. 3 (2014): 405-424.

Hyrkkänen, M. “All History is, More or Less, Intellectual History: R. G. Collingwood’s Contribution to the Theory and Methodology of Intellectual History.” *Intellectual History Review* 19, no. 2 (2009): 251-263.

Koopman, C. “Bernard Williams on Philosophy’s Need for History.” *The Review of Metaphysics* 64, no. 1 (2010): 3-30.

Lang, M. “‘Globalization and Global History in Toynbee’.” *Journal of World History* 22, no. 4 (2011): 747-783.

McNeill, W. H. *Arnold J. Toynbee: A Life*. New York-Oxford: Oxford University Press, 1989.

Myers, E. D. “A Note on Collingwood’s Criticism of Toynbee.” *The Journal of Philosophy* 44, no. 18 (August 1947): 485-489.

Skagestad, P. “Collingwood and Berlin: A Comparison.” *Journal of the History of Ideas* 66, no. 1 (January 2005): 99-112.

Toynbee, A. J. *A Study of History*. London-New York-Tronto: Oxford University Press, 1934-1961.（トインビー，Ａ・Ｊ『歴史の研究』.「歴史の研究」刊行会訳．経済往来社，1969−1972.）

―. *Greek Historical Thought: From Homer to the Age of Heraclius*. London: J. M. Dent & Sons

Ltd, 1950.

—. *The Western Question in Greece and Turkey: A Study in the Contact of Civilisations*. reprinted edition of the 2nd edition (1923). New York: Howard Fertig, 1970.

White, H. V. "'Collingwood and Toynbee: Transitions in English Historical Thought'." *English Miscellany* 8 (1957): 147-178.

カー，E・H『歴史とは何か』．清水幾太郎訳．岩波書店．1962.

春日潤一.「A・J・トインビーの国家観に関する解釈をめぐって」.『創価大学大学院紀要』27（2005）: 277-295.

河瀬明雄.「トインビーとコリングウッド—歴史思考の相対性と歴史の対象との関係について—」.『長崎大学教養部紀要　人文科学』．8 . 1968 : 25-40.